

当院検査室における心臓超音波教育と精度向上への取り組み

◎柴原 明日香¹⁾、一村 健一¹⁾、池上 新一¹⁾
社会医療法人 雪の聖母会 聖マリア病院¹⁾

【背景】当院臨床検査室は入職時 OJT 教育を ISO 教育管理チーム主導で行い、各部門配属後は部門内主導による教育となる。生理検査室の心臓超音波(UCG)検査件数は年間一万件を超えており、全超音波検査件数の約半数を占める。UCG に携わる技師は 10 名(超音波検査士 7 名)であるが専従ではなく、その他生理検査業務に加え採血や夜勤業務も担当しており、新たな UCG スタッフの育成が急務となっている。今回、新規教育に加え、現スタッフの知識向上を目的に当院検査室が行っている取り組みについて報告する。【取り組み】教育担当者は他の業務の兼ね合いもあり日替わりとなる。研修チェックリストを基に進めているものの、超音波検査は画像判断に知識量や経験の差、画像描出には個人の技量が影響するため、どの時点で次の段階に進み、最終的に研修終了とするか判断に苦慮することが多かった。そこで経験豊富な超音波検査士を教育リーダーとし、進捗確認を一元化したうえで月 1 回のカンファレンスで研修者の現状を報告するようにした。これにより教育の進捗状況をスタッフ間で共有

でき、異なる担当者であっても研修者のレベルに合った指導ができるようになった。また、2023 年のレポートシステム(LS)更新に伴い、全ての UCG 検査は循環器医の確認が行われるようになった。技師が検査施行し報告書作成を行った後、循環器医により改めて画像読影が行われ超音波診断が成されレポート確定となる。その際、検査者に伝えたい点があれば、コメントを LS 内に記載するように依頼し、検査者にフィードバックされる仕組みとした。また、月 1 回症例検討会を行っており、経験した症例を要員に共有している。担当者は経験年数問わず輪番制とし、スライドを用いた症例提示を行う事で、知識向上はもとより学術経験を積むうえでも有意義であると考えている。【まとめ】UCG 教育リーダーを指名したことで、リーダーを中心に進捗状況の把握ができるようになった。スタッフ間で共通認識を持つことで教育は段階的な計画を立てて指導することができるようになり、教育を円滑に進めることができる。また、症例を共有することは全スタッフの質の向上に繋がっていると考え。